平成 30 年度 南相馬市地域課題解決調査研究事業
「南相馬市の放課後児童クラブにおける学習支援のありかたの研究」
〜学力向上と貧困予防の方策について〜 報告書
法政大学 湯浅誠研究室

1.調査研究の背景

東日本大震災発災直後の 2011 年から継続して南相馬市にて放課後の子どもたちの居場所「みなみそうまラーニングセンター」を運営し、また放課後児童クラブの巡回支援をしている NPO 法人トイボックスより、湯浅に支援の要請があり、2018 年 2 月に二ヶ所の放課後児童クラブを訪問した。

その際、放課後児童クラブの支援員は少人数で多数の子どもたちをケアしており、一人ひとりにまで手が回らない状況であるクラブが存在することが、現場の状況や支援員のヒアリングからわかった。この課題の解決のためには、支援員の意識・スキルの向上や地域人材の活用が必要だが、それに対する抵抗感も現場にはあることがわかった。

そこで、放課後児童クラブに通うすべての子どもたちがよりよいケアを受けられるようにするための調査研究を実施した。

2.調査研究の目的

南相馬市幼児教育課とＮＰＯ法人トイボックスが連携して行っている「文部科学省緊急スクールカウンセラー等派遣事業」のサポートチームとして放課後児童クラブを訪問し、支援員の人手不足を解消し、一人一人の子どもたちにきめ細かい支援が難しいという地域課題の解決に貢献する。
長期的には、様々な課題を持つ子どもを含めた全ての子どもに丁寧に個別支援や学習支援等を行い、学力向上をはかることができれば、子どもの自立の基盤をつくり、貧困の連鎖の予防をはかることができるという効果が生まれると考えた。

3.調査研究参加者

湯浅誠
宍戸杏香奈
花城わかな
オフォリ瑛之須

加藤芽依
太田穂奈美

4.調査研究の内容

○第１回現地調査（５月２７日～２８日）
・湯浅教授と学生２名にて上町児童クラブの現場に入り学習支援を行い、外部支援が入ることのメリットを支援員に感じてもらった。
・今後の調査研究や放課後児童クラブにおける学習支援の進め方、学習や地域人材の関わり方について南相馬市長、副市長、教育委員会事務局長、幼児教育課長等と面会し、方針を確認した。

○第２回　放課後児童クラブ現地調査（９月１１日～１２日）
・学生のワークショップを実施し、現状に対して学生や市民にできることを考えた。
・上町児童クラブ、東町児童クラブを訪問し、実際に児童の学習支援を行う中で対応策について考えた。
・放課後児童クラブ訪問前に研修・講習を行い、終了後に振り返りも行った。（次項・学

生による活動記録を参照）

○第３回 高橋紀子福島大特任准教授による放課後児童クラブ支援員を実施、研修に参加（１０月４日）
・「課題を持つ子どもの理解」について高橋准教授より市内 14 カ所の放課後児童クラブの支援員に伝えてもらい、一人一人の子どもをよりよく見る意識を支援員にもってもらった。
・目指すべき方向性・ビジョンの心合わせをはかることができた。

子育て、教育考える

被災地支援団体 南相馬でシンポ

東京電力福島第一原発事故後、南相馬市などの被災地で教育支援活動に取り組んでいるNPO法人トイボックス（本部・大阪市）主催の子育てに関するシンポジウムは7日、南相馬市内で実施された。子どもたちの貧困、教育格差などが意見交換した。

教育関係者ら約百人が来場。新井紀子国立情報研究所教授（入試問題で知られる新井紀子プロ）の研究報告を基調講演とし、「学校や家庭、地域が社会的に孤立している子どもたちを支えるためには、学校や家庭だけでは限界があるとしてコミュニティ・スクールなど地域全体で子育てに関わる一貫性のある教育が必要だ」と訴えた。大人向けの会場では、子ども食堂の運営などを通じ、地域全体で子育てに関わる一貫性のある教育が必要だ」と訴えた。大人向けの会場では、子ども食堂の運営などを通じ、地域全体で子育てに関わる一貫性のある教育が必要だ」と訴えた。

新井教授は講演で、「学校や家庭、地域が社会的に孤立している子どもたちを支えるためには、学校や家庭だけでは限界があるとして、コミュニティ・スクールなど地域全体で子育てに関わる一貫性のある教育が必要だ」と訴えた。

新井教授は講演で、「学校や家庭、地域が社会的に孤立している子どもたちを支えるためには、学校や家庭だけでは限界があるとして、コミュニティ・スクールなど地域全体で子育てに関わる一貫性のある教育が必要だ」と訴えた。

パネルディスカッションでは、湯浅誠氏（法政大教授・元内閣府参与）、大和田敦彦氏（法政大教授）、新井紀子氏（国立情報研究所教授）が登壇し、「子どもの貧困と教育格差」をテーマに議論した。

左から大和田教授、新井教授、湯浅教授、白井代表理事

スマイルふくしま

森山 珀ちゃん 3

現住所＝白河市

ひとことメッセージ 仮面ライダーが大好き。（父親の鎌倉さん）

地域の力で子育てを

湯浅 誠氏 新井紀子氏

「子ども支え、次世代に」

「大人から話し掛けを」

南相馬でシンポ

子どもに未来を

押部さん姉妹 金賞

緑の提言・作文コンクール

ふくしま子ども体力向上事業

吉井田

・学生も2名が参加した。

○第4回　新井紀子国立情報研究所教授・湯浅教授によるシンポジウム開催

・『Aivs教科書の読めない子どもたち』の著者・新井紀子氏と湯浅教授、大和田教育長による「子どもの貧困」についてのシンポジウムを開き、市民に子どもたちに積極的に関わる意義と必要性を感じてもらった。

・その上で、放課後児童クラブに関わる地域住民の役割の明確化やマッチングの実現に着手。

・実際にこのシンポジウムをきっかけに放課後児童クラブの支援員の求人に繋がる効果も生まれた。

5.学生による活動記録（抜粋）

「児童との関わりの中で心がけたこと」

・支援員の先生方の児童たちとの関わりを観察するようにした。

・研修の内容を受け、自分自身の満足のためではなく、児童中心の時間になるように、非主体的・非主導的な関わりになるように心掛けた。

「気づいた点」

・支援員さんの関わりを観察する中で、支援学級に通っている子どもを過度にかばうのではなく、まずは当人たちのみで会話させ、最終的に職員が介入するという一連の対応が適切だと感じた。
・特別支援学級に通う子どもの「国語と算数の授業だけ違うところにいくの。」と話していた様子から、児童同士で特別支援学級に対する偏見や、特別な感覚がないということを感じた。

「気になった点」
・一度に３人の職員が退職したという話があり、その理由が気になった。継続が難しい労働環境のか。また、職員の入れ替わりの頻度によっては、子どもとの関係性や、課題をもつ子どもの支援の質にも影響が出てくるのではないかと考えた。
・人数が多い児童クラブでは、支援員の先生方も入退室管理や安全管理で手一杯であり、もっと子どもと関わりたいと思っても叶わない状況であることが理解できた。地域の見守りボランティアなどに安全面での見守りをお願いすることができたら、支援員の先生方が子ども達に丁寧に関わる時間を増やすことができるのではないかと感じた。

「建物構造について」
・少人数で多くの子ども達を見守る上で、職員のスペースからの死角が少なく、室内全体を見渡せる構造がのぞましいと感じた。

6.考察と今後に向けての課題、提言

１年間の調査研究を通じて、支援員の人手不足と離職率の高さが大きな課題の１つであると認識した。この課題が児童に対する支援員の数の少なさや、支援員の身体的・精神的負担の大きさの問題に拍車をかけている。

そのため私たちは放課後児童クラブの子ども達に関わる支援員等の大人の人数を増やす必要があると考えた。その解決策について以下に述べる。

一つ目は、地域の有償無償ボランティアの活用。放課後児童クラブで児童を支援する、または見守る大人の人数が増えれば、児童への支援が手厚くなると同時に、現場の支援員の負担も減ると考えられる。また、ボランティアスタッフの中に発達障がい児などの支援に関する経験をもつ方がいれば、その方から現場の支援員に、支援の仕方や知識を伝えることもできる。そうなれば、支援員の負担やストレスの減少も期待でき、さらに支援員の離職率の低下にもつながると考えられる。

また、放課後児童クラブ支援員の待遇、条件面の改善も必要だと考える。現在のように児童数が多く、また発達障がいなどの個別・特別な支援が必要な児童が多い状況下におい

て、放課後児童クラブ支援が身体的にも精神的にも負担が大きい仕事となっている。そのため、人手不足が解消せず、離職率が高い状況が続いている。一人ひとりの子ども達の特性に合わせたきめ細やかな支援を実現する上において、支援員一人ひとりの専門性の向上とともに、より多くの支援員・スタッフで児童をケアする体制づくりが求められていると感じた。

最後に、一年間の調査研究を通じて温かく迎えていただき、お世話になった地域の皆様に深く感謝申し上げるとともに、貴重な体験をさせていただいたこの地域にこれからも関わり続けたいと考える。